

ZEPHYROS

1998年
第3号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス
The National Museum of Western Art, Tokyo

目 次

特集 お待たせしました リニューアル・オープン！	3
-----------------------------------	---

'98年度展覧会スケジュール	5
エッセイ「上野の杜」発 ③	6
海老名 香葉子	
財団インフォメーション	7
ゼフュロスギャラリー	

特集

お待たせしました

前庭地下の新展示場の建設と、本館の
免震工事を終えて、この春から美術館
が再び開館します。皆様のご来館をお
待ちしております。



オーギュスト・ロダン 《青銅時代》1876年 ブロンズ

リニューアル・オープン！

美術館がもっと身近に

国立西洋美術館は、1996年4月の「大英博物館所蔵 イタリア素描展」を最後に休館し、地下の新展示場建設工事、さらにル・コルビュジエ設計の本館を、地震に強い建物にする免震工事を並行して行なっていました。休館中は、皆様にご迷惑をおかけしましたが、工事もほぼ終了し、4月28日より再び開館します。ただし、4月の開館では、全館がオープンするわけではありません。また、前庭に展示されていたロダンの《考える人》、《カレーの市民》などの彫刻は、工事のために移設保管したままで、復帰には少し時間がかかる予定です。

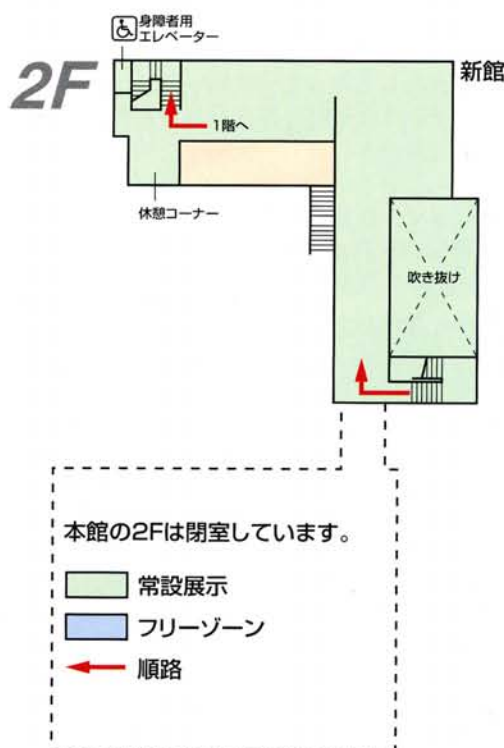
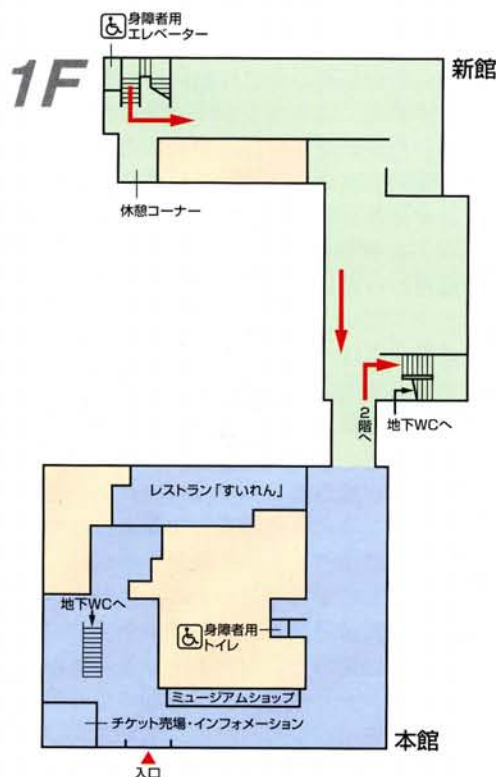
今回は、本館の1階と新館がオープンします。新館では松方コレクションを中心とする近代の絵画作品を展示します。本館の展示室に、ルネサンス期から18世紀末頃までの古い絵画作品も展示して全館オープンするのは、今年の秋からになります。9月には、新設された前庭地下の企画展示館（正式名称）のギャラリー

において、最初の展覧会「クロード・ロランと理想風景（仮称）」が開催されます。

リニューアルした美術館は、展示スペースが増えるだけでなく、本館の1階までがフリー・ゾーンとなります。自由に前庭の彫刻の前で待ち合わせをしたり、本館のレストランで食事をしたり、ミュージアム・ショップで買い物をすることができるようになります。新しいレストラン「すいれん」は、席数も増え、メニューも充実し、春のオープンからご利用いただけます。都合によりミュージアム・ショップはまだ仮設のものですが、秋には新規拡張し、美術関係の書籍も充実したショップとなります。

また、秋にはフリー・ゾーンの中に、ハイ・ヴィジョンや美術館の出版物・資料の閲覧コーナー、所蔵作品の検索が可能なコンピューターなども設置する予定です。

美術館の情報は、インターネットの国立西洋美術館ホームページ（<http://www@nmwa.go.jp/>）を通じて案内しております。



新館の常設展示

2年ぶりに開館する新館には、松方コレクションを中心とする、19～20世紀の絵画、彫刻およそ90点が展示されます。

2階から始まる展示は、ロマン主義絵画の巨匠ドラクロワ、田園の風景を詩情豊かに描いた自然主義のコローやミレー、現実をありのままに忠実に描く写実主義のクールベ、写実をさらに押し進め、目に見える光と色の変化を画面に再現しようとする印象派のピサロ、ルノワール、モネ、そして印象派の画家たちに影響を与えたマネなど、19世紀のフランスの画壇を代表する作家たちの作品が時代の流れにそって展開します。

展示にそって作品を見ていくと、画題の変化とともに、画面が明るくなってきます。印象派の画家たちは、自然の色彩や光の明るさを画面に再現することを重視したので、おのずから風景画が主となりました。また、絵の具の混色による画面の濁りを避けるため、複数の鮮やかな色を画面に並置して、見る人の目の中で色が混じり合うようにしました。このため画面は様々な色の固まりの集合体となり、輪郭線、奥行き、明暗といった三次元的表現が失われていきます。こうした変化は、一連のモネの作品に見ることができます。

また、2階では絵画と並んで、同時代の彫刻家ロダンの作品が見られます。力強く写実的な《青銅時代》は当時、「モデルから直接型どられたのではないか？」とまで言われました。

1階に降りると、印象派の色彩分割の考えを更に科学化し、理論化した点描派のシニャック、印象派の明るい色彩表現と平面性を受け継いだゴーガン、ゴッホ、ドニ、セザンヌなどの作品を見ることができます。

一方、印象派とは別に、伝統的な絵画の流れを受け継ぎながら、自己の個性を生かし独自の芸術を築き上げた芸術家で、瞑想的な装飾画を描いたピュヴィ＝ド＝シャヴァンヌ、神話や聖書を主題とした幻想的な作風のモロー、その他にコッテ、アマン＝ジャン、カリエールなどの作品も展示されています。彼らは、今では印象派の影に隠れた存在になってしまっていますが、当時フランス美術界の中心勢力であった、政府主催の展覧会「サロン」において好まれた作家であり、19世紀末の美術において重要な役割を果たしました。

最後のコーナーには、19世紀に印象派によって近代化された絵画が、20世紀へと発展展開する流れを、当館に寄贈された梅原龍三郎、山村徳太郎両氏のコレクションを中心に紹介しています。強烈な色彩で野獣派と呼ばれたフォーヴィスムの活動に参加したヴァン・ドンゲン、マルケ、ルオー、フォルムを重視したキュビズムのピカソやレジェ、シュールレアリスムのエルンストやミロ、そして20世紀アメリカにおいて発展した抽象表現主義のボロックなどの作品が見られます。



'95、'96年度新収蔵作品

単年度予算という制度上の理由から、国立西洋美術館の毎年の作品購入は、ほとんどの場合に複数の作品を組み合わせることになります。しかし、その場合でも予算の大半が1点の主要作品に投入される場合は少なくありません。'95年度と'96年度も、まさしくそうした購入でしたが、全くの偶然から、両年とも中心は同じフランス19世紀の、しかも女性を描いた作品となりました。ギュスターヴ・モローの《聖なる象》とギュスターヴ・クールベの《眠れる裸婦》です。ここでは紙面の都合からも、この2点に絞って紹介することにします。

《聖なる象》は、モローの生前に一度展覧会に出された後ずっと個人の所蔵となって、最近までまともな複製図版さえなかった幻の水彩画です。正面を向いた象が静かに水辺を歩み、その背には東洋風の衣装を身に纏った女性が横たわり、女性の回りには彼女を囲み礼讃するかのように有翼の人物が5人、宙を舞っています。モローはこの作品の準備デッサンに「ベリ」という書き込みをしており、中央の女性がベリ、すなわちベルシアの妖精であることが分かりますが、具体的な説話などには関わりがないようです。画家は動物園や植物園でのスケッチや、装飾を集めた複製図版などのイメージを自由に引用し、奥も象もきらびやかな東洋風の装飾で覆い、水辺には巨大な花や植物を茂らせ、



↑'96年度新収蔵作品
ギュスターヴ・クールベ
《眠れる裸婦》
1858年 油彩・カンヴァス

←'95年度新収蔵作品
ギュスターヴ・モロー
《聖なる象》
1885年頃 水彩・グワッシュ・紙

見る者をひたすら東洋の夢幻へと誘うような画面を作り出しています。

一方、窓辺の寝台で眠る裸婦を描いた《眠れる裸婦》には現実性が横溢しています。19世紀の中頃まで、展覧会など公の場に展示される裸婦は、神話や歴史上の美の典型として、理想化されたプロポーションを与えられていなければなりません。しかし、一方では個人の寝室向けに制作された「閨房画」といわれるエロティックな絵画も存在し、しばしば現実の女性としての生々しさを強調されていました。クールベはこうした裸婦を取り巻く二重構造を敢えて破壊するかのよう、公的な場にも「醜い」裸婦を送るなどして物議を醸した画家だったのです。閨房画として制作された《眠れる裸婦》では、寝室の裸婦という私的な情景が、画家の故郷フランシュ＝コンテの風景が見える窓辺に置かれることで、田園のヴィーナスなどとは異なる裸婦の現実性が強調され、観者は隠されるべきものを覗いているのだということを強く意識させられることになります。

夢想と現実という、全く異なる設定に置かれながらも、この二つの作品は19世紀の男性が女性イメージに投げかけた眼差しを如実に伝えているのです。

モローの作品は、一昨年東京国立近代美術館で開催された「交差するまなざし」展に出品されましたが、今回は展示されません。クールベの作品は東京では初の公開となります。

'97年度新収蔵作品については次号(4号)で紹介します。

新展示場開館記念特別展

クロード・ロランと理想風景(仮称)

会期：1998年9月15日(火・祝)～12月6日(日)

主催：国立西洋美術館、朝日新聞社

この展覧会は、西洋風景画の頂点に立つクロード・ロラン(1604/5-82)に焦点を合わせ、その初期から最晩年の作品までを回顧すると同時に、彼の作品によって代表される西洋風景画の最も重要な流れである「理想風景」の意味と広がりを検証しようとするものです。絵画、素描、版画など約60点のロラン作品を中心に、クロードに強い影響を受けたターナーをはじめとする「理想風景」の系譜に属す画家たちの作品なども加え、全体で約90点の作品から構成されます。

新展示場開館記念特別展

ゴヤの版画芸術(仮称)

会期：1999年1月12日(火)～3月7日(日)

主催：国立西洋美術館、(財)西洋美術振興財団

本展は、画家として有名なばかりでなく、西洋版画史上最高の版画家の一人と見なされているフランシスコ・ゴヤ(1746-1828)の作品を、同時代の版画の脈絡のなかで捉えらえることにより、その独創性と革新性を浮かび上がらせることを目的としています。そこで、主題、モチーフ、技法、用途をテーマとして、ゴヤの作品と他の作家の作品を各テーマごとにいっしょに展示し、ゴヤが同時代の版画から何を吸収し、また、それを基にいかにして独自の作品を生み出したか、その偉大な想像力の秘密を探ります。ゴヤの版画と、それに関連する同時代の版画およそ300点で構成します。



フランシスコ・ゴヤ・イ・ルシエンテス
版画集『妄』より《大阿保》

海老名 香葉子 (えびな かよこ)

昭和8年10月6日東京、本所生まれ。昭和27年、林家三平と結婚。昭和55年夫三平の死後、林家こん平をはじめ数多くの弟子を支える。現在、マスコミで幅広く活躍中。二男二女の母でもある。

長男は林家こぶ平（落語家）、次男は林家いっ平（落語家）。著書に「ことしの牡丹はよい牡丹」（文芸春秋）、「姑・うた様と」（講談社）、「あした天気になあれ」（朝日新聞社）、「お咲ちゃん」（徳間書店）、「半分のさつまいも」（くもん出版）など多数。また自らの少女時代を描いた「うしろの正面だあれ」（金の星社）は長編アニメとして映画化され反響を呼んだ。台東区根岸在住。



春は上野の山桜、降り積む雪が白雲の・・・から始まる校歌は、上野山下に位置する根岸小学校のものである。夫、子供たち親子二代が、今では三代となって学んでいる。

仰ぎみれば上野の山・・・

だったが近年ビルが建ち並び、残念乍ら、その贅を失ってしまった。

だが歩いていても自転車でも、すぐに行けるお山は、当たり前前の散歩コースになっている。

家からの表コースは寛永寺坂を登って左に入っていく。裏コースは芋坂との間の陸橋を渡って墓地の中を突っ切って、一番美しい、「誰にも教えちゃいけねえ」町内の頭の言葉通りの桜並木をぬけて、寛永寺の境内を横から入って表に出て山の左コース、右コースと廻る。春夏秋冬、美しい。こんなにいいとこだもの居ついてしまう人がいても仕方ないわねえと、いけない言葉がフツでてしまう。

さて、私の夫は親子共に落語家だったが音楽も美術も大好きで、上野は憧れの地であったと家族は知っていた。芸大から流れる音楽を、しばし立ち止まり耳傾けていたりしていた。次女が音楽にめざめた頃は芸大にすゝませたいが夢であった。

美術館へもよく出かけた。私も何度か付いて行ったが足が棒になってしまうほど見て廻って、夫はその足で自分の仕事場に駆け参っていた。

雨が降ろうが槍が降ろうがを地でゆくように出かけていた上野の森。

次男が歩きだした頃には「小さいし、温しくしてないといけないから」と引きとめても連れ出して行った。

ここに一枚の絵葉書がある。

ラファエロの雲の上のヴィーナス、次男宛に残したものである。

「緑がいっぱいになったねえ。平和だから。」

『今日、君と二人で上野に行きましたね。白いセーターでコレクションの絵をみましたね。松坂屋の食堂は、とても混んでいましたが君はおとなしく並んで、お子様ランチの亀と遊んでました。もうじき寛永寺幼稚園に入園ですネ。』

海老名泰助君 昭和五十年三月九日 父より
その子も二十七才になり思い返して私にはできないことを子供たちに沢山与えてくれていたのだと上野の山を通して父としての情を、胸あつく感じるのだ。

また朝のジョギングも頑張っていた。寛永寺をぬけて不忍池を一周、その足で東大の三郎池まで向かった。

あんなに元気だったが五十三才のとき倒れて再起不能と云われたけれど、上野へ出かけて懸命ののりハビリ運動をし、驚くほど快くなり見事仕事に復帰、またジョギングを再開した。

でも寿命——それから十ヶ月後、突然のように天国へ旅だってしまった。

夫が逝って半月ほどたったある日、お年寄りの男性が訪ねて下さった。玉子を沢山箱に入れて、「これ師匠にお供えして下さい。私は上野の山を通して毎日、玉子を運んでいる者なのですが、雨の日、自転車ごと倒れて、師匠に助けてもらったんですよ。優しい人でしたねえ。」

涙をポロポロ流して話された。

私も話を聞きながら泣いた。

だから、上野へ向かうときは「お父さん」と云いたくなるほど上野と林家三平は離せない。

「緑がいっぱいになったねえ。平和だから。」と深呼吸。それをそのまゝ、私たちは続けている。

上野の山、どれだけの恩恵を受けているか計りしれない。感謝せねばならない。

財団インフォメーション

◆平成8年度の事業報告

この年度は国立西洋美術館が4月7日まで開館し、のち工事休館に入りましたので、以後は事業計画に従い、館外展を支援したほか、ほかの事業は概ね前年度と同様の支援活動を行いました。

1. 展覧会、講演会等の支援

- ①国立西洋美術館の特別展「大英博物館所蔵イタリア素描展」、同時開催の小企画展「マリOTT・ディ・ナルドの〈聖母戴冠〉」を共同主催
- ②東京国立博物館（会場）と国立西洋美術館の主催による「子どものための美術展－どうして像はつくられたの？」を後援、同展覧会鑑賞用セルフガイドを刊行支援
- ③東京国立近代美術館（会場）と国立西洋美術館の主催による「交差するまなざし－ヨーロッパと近代日本の美術」を協賛、ポスター製作費、図録購入等の支援
- ④岩手県東和町、東和町教育委員会、萬鉄五郎記念美術館（会場）と国立西洋美術館による「国立西洋美術館所蔵－ロダン展」を共同主催、同展の広告宣伝費、図録購入等の支援
- ⑤「ロダン展 高階秀爾講演会」（会場 東和町総合福祉センター）を共同主催
- ⑥「世界の中のル・コルビュジエ：ル・コルビュジエと日本」国際シンポジウム（会場 建築会館ホール）の主催者の一員として、同実行委員会事務局を財団事務局に置き、一般聴講希望者のはがき、ファックスによる受付及び実行委員会の経理事務を担当支援

2. 資料収集、調査研究の支援

- ①版画「連作＝ローマの景観」（ジョヴァンニ・パッティスタ・ピラネージ作）1点を購入し、国立西洋美術館に寄贈
- ②国立西洋美術館の情報資料の充実に資するため、外国の図書資料、文献等を購入寄贈
- ③調査研究の一環として、特別講演会「カラヴァッジョ作〈キリストの捕縛〉－再発見と修復過程について－」（講師 アイルランド国立美術館主任学芸員 セルジョ・ベネデッティ氏）を国立西洋美術館（会場 同館会議室）と共同主催し、経費面を支援

3. 普及広報・職員研修等の支援

国立西洋美術館の休館に伴い、普及広報面の支援はなかったが、職員研修等に対しては、国内外の学会分担金をはじめとする渉外用経費を支援

4. 出版物の刊行

「子どものための美術展－どうして像はつくられたの？」の鑑賞用セルフガイドを印刷発行

5. ミュージアム・ショップの運営

ミュージアム・ショップは国立西洋美術館休館とともに休止。ただし、カタログ等は内外からの注文に応じたほか、東京国立近代美術館や萬鉄五郎記念美術館における館外展には、出品作品関係グッズの委託販売業務を実施

6. 機関誌等の刊行

初年度に刊行を見送った機関誌は、国立西洋美術館が「西米ニュース ゼフェロス」を刊行することとタイアップすることになり、財団は1ページを受け持ち、これにより財団活動の周知をはかることとなった。なお、発行者は財団で、当分の間は年2回、第1号を平成9年3月18日に刊行

7. その他の印刷物は国立西洋美術館の資料交換用として必要部数を寄贈、また、展覧会或いは調査研究のため国立西洋美術館を訪れた、内外の美術関係者や学識者などと国立西洋美術館関係者との意見交換交流を支援

◎平成8年度の会計収支状況は次のとおりでした。

収入 37,770千円 支出（事業費） 12,250千円
（管理費） 8,826千円

●役員異動

理事辞任 行平次雄（9.11.21）

財団設立以来のご指導に対し、厚くお礼申し上げます。

理事の現職変更

浅尾新一郎 国際交流基金理事長→顧問（9.12.21）

◆賛助会員について（平成10年2月25日現在）

賛助会員に変更がありましたので現在の名簿を掲出いたします。

●個人会員

鹿島昭一、金平輝子、島崎聡志、高階秀爾、樋口廣太郎、本田 弘

●法人会員

アサヒビール、アートよみうり、朝日新聞社、稲元印刷、印象社、鹿島建設、キャノン販売、サントリー、清水建設、新潮社、精養軒、トップアート、東京新聞、東京スタジオ、日本通運、野村證券、博報堂、美術出版デザインセンター、便利堂、森ビル、雪印パーラー

●賛助会員証について

長らく検討してまいりました賛助会員証ができあがりました。デザインは右の写真のとおりです。

この会員証は、個人会員には1枚、法人会員には3枚あて、昨年11月にお送りいたしました。

有効期限は発行日からの1年間で本年4月28日開館の国立西洋美術館常設展からご使用できます。



年会費は個人10万円、法人会員1口30万円で、何時からでもご加入いただけます。下記のような特典もございますので、ご加入希望の各位は、先ず応募要項を事務局までご請求ください。

■会員優遇内容

1. 国立西洋美術館優待券（個人1枚、法人1口1枚）が発行されます。（国立美術館・博物館等の展覧会観覧に有効です。）
2. 賛助会員証を差し上げます。（国立西洋美術館の展覧会に有効です。）
3. 国立西洋美術館の展覧会招待状、無料観覧券をお送りします。
4. 国立西洋美術館の所蔵品図録「名作選」や展覧会図録等をお送りします。
5. 国立西洋美術館の主催事業（講演会等）への無料参加ができます。
6. 国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品（対象商品）を割引させていただきます。

編集後記

ゼフェロスとともにぽっかぽかの春がやってきました。長かった休館もやっと終わり、活動の再開です。そしていよいよ9月の全館オープンへ向けてのカウントダウンも始まりました。こころときめく絵や彫刻に出逢えますように… ①



ジャン＝パティスト＝カミュー・
コロー
(1796-1875)

《ナポリの浜の思い出》

1870-72年

油彩・カンヴァス 175×84cm

コローは生涯に三度イタリアに旅行しているが、ナポリを訪れたのは最初の遊学の際のただの一度に過ぎず、しかもかなり短期間であったと推定される。その時、彼はナポリの城、ヴェスヴィオス山、イスキア、アマルフィなどを描いたスケッチ風の小品を数点残している。このナポリ旅行は非常に印象深かったらしく、後年何点もナポリを取り上げた風景画を描くことになる。本作品は晩年のもので、縦長の画面を大胆に用いて、両側に高く揺れる樹木を配し、遠方に明るいナポリの浜を描くという熟考された画面構成を示している。木蔭をなす前景では、幼児を抱いた女とタンバリンを左手に掲げた女が手をつないで踊っており、南欧らしさを演出している。画面全体は、コロー晩年の作品に特徴的な銀灰色の微妙なもやに覆われており、いかにも追憶の光景に相応しい雰囲気が醸し出されている。



カルロ・クリヴェッリ
(1430/35頃-1494/95)

《聖アウグスティヌス》

1487-88年頃

テンペラ・板 140.7×39.5cm

クリヴェッリは、ルネサンス初期ヴェネツィア派の重要な画家のひとりである。彼の画風は緻密で硬質な装飾的構成と強い感情表現の点で非常に個性的だが、また経歴においても、彼はなかなか波乱に富んだ人生を送っている。20歳代で姦通の罪を問われて故郷ヴェネツィアを去り、以後、マルケ地方などイタリア中部の諸都市を転々としながら制作した。縦長の画面に聖アウグスティヌス（354-430年）の像を描いたこの作品も、おそらく本来はボローニャ近郊カステル・サン・ピエトロの教会のために描かれた祭壇画の一部と推定されている。司教冠を飾る宝石類や金刺繍を施した衣の色鮮やかな表現は、クリヴェッリ画の典型的な特色である。アウグスティヌスが持つ3冊の書物は、有名な『神の国』や『告白』など、この聖人の精力的な著作活動を暗示している。この作品は、松方幸次郎がヨーロッパで購入し戦前に国内に持ち込まれた、いわゆる「旧松方コレクション」の一点である。その後国内の個人所蔵家の手元にあったが、1962年に国立西洋美術館が購入した。



ユベール・ロベール

マルクス・アウレリウス騎馬像、トラヤヌス記念柱、神殿の見える空想のローマ景観

1786年

油彩・カンヴァス

161×107cm

● 誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフュロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS

国立西洋美術館ニュース
ゼフュロス

ZEPHYROS 第3号

印刷発行日 平成10年3月14日(年2回発行)

編集 国立西洋美術館

印刷 株式会社 稲元印刷

発行者 財団法人 西洋美術振興財団

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

国立西洋美術館内

TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135